

極樂通信



Small signature or mark in the upper right corner.

Vol. 25
UBUD



photo:Y. Hori

さて、サテである。バリではあらゆるところでこのサテを焼いているサテ屋を見かける。パサール近辺の道端やオダランの寺院の周りなどでは、必ず数件のサテ屋がパタパタと破れた団扇を仰ぎながら椰子の炭でサテを焼いて売っている。もちろんサテを専門にしたワルンもあるし、高級レストランのメニューにもある。

サテといってもいろいろな種類があり、鶏、豚、牛、羊、魚、稀には海亀などもある。またバリ風のサテはいろいろな香辛料と混ぜ合わせたミンチ肉をつくねのようにしてサテにする。どれもウマイからビンタンのお供にピッタシである。ワルンなどではこのサテとソトとナシ（スープとごはんね）がセットになっていて、これまたバグースな組み合わせである。バリ風サテ以外はビーナッツソースがたっぷりかかっているし、スープは訳の分からない臓物がいっぱい入っているが、これがまたウマイのだ。ちなみに個人的にはこのサテ・ソト・ナシのセットはカンビン（羊）のものが好きだったりする。

う～む、こうやって書いていただけで食いたくなる！

堀 祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama		● TOKO BEST 店	
Krisis Meneter-----	4	mama & Leon-----	22
ごあいさつ-----	5	● Warung 味な店	
PELENGKUNGAN-----	6	Ayung Teras-----	22
● Help Wanted		● Pondok Manis 私の常宿	
バリで働きたいあなたへ……-----	8	Yuliati House-----	23
● Perawatan Anak [6]		● Berita Terbaru	
正しい出産と育児 in Bali-6-----	10	その他のニュース-----	24
● Pin-Pin-Boh/5		● Orang-orang Ubud/25	
インドネシア語講座 / 5-----	13	うぶんな人々 / 25-----	25
● 留学生日記 / 6		● O-Shi-Ra-Se	
カカエンで飛び入り参加-----	14	おしらせ-----	26
● C・O・L・U・M・N		● Pengumuman	
通信欄から-----	15	でんごんばん-----	26
● Bali Buku Catatan Harian/3			
バリ日記 [3]-----	16		

○表紙のことば○

我第一次来産土
迷入巴里舞踏
我有一時寺院誕生節
星觀伊藤博史之
飯面舞非常有意思
我感動即写

工藤 頌司 

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

Macintosh format または Windows format の FD (Text Data)

E-Mail :

MHC03202: 菅原 (NiftyServe)

GCB01162: 堀 (NiftyServe)

hori@potomak.com (Internet)

eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

特派員報告 **Krisis Meneter**

長かった sidang umum (大統領選出会議) が3月10日に終わりました。

大統領は引き続いてスハルトが就任し、副大統領と各大臣の多くが交替となりました。

これでやっとルピアとドルが少しずつ以前のレートに戻ってくるかな…と思ったのですが、予想に反して今だに(3月下旬現在)1ドル=8.000Rp~9.000Rpのあたりにとどまったままです。

国内の物価がいろいろ上がって…というのは前号でもお知らせしましたね。短期で遊びに来るツーリストにとっては少々の物価高もへのこっぴ。買い物天国でウハウハ、なので、バリの一般庶民にとっては本当にたいへんな毎日なのです。インドネシアの人々は、今のこの状態を krisis meneter = クリシス・ムステール(通貨危機)と呼んで、毎日のニュースや会話の中でこの単語をしょっちゅう使っています。そんな中でエナちゃんが耳にしたエピソードをいろいろ書いてみましょう。

少しずつルピアが下がりはじめた去年の暮れのことです。まずはじめに値段がハネ上がったのがなんとココナツ・オイルでした。地元で作っているはずのココナツ・オイルがなぜ!? ドルとは何も関係ないのに…と訝しんだのはエナちゃんばかりではありません。便乗値上げにしては早すぎます。工業製品ではなく、ビールの空きビンなどに漏斗で入れてもらって1ボトル1,500ルピアくらいだったのがまたたくまに3,000ルピアになりました。バリの家庭では毎日の料理にココナツ・オイルは欠かせません。特にサンバルにはまったくした風味のココナツ・オイルは必需品。スーパーには精製された市販のサラダオイルがいくつも並んでいるのに、今だにバリの主婦たちはココナツ・オイルしか使わない人が多いのです。エナちゃんのお義母さんは毎朝、「これからどうなっちゃうのかしらねえ」と溜め息をつきながら、「よくジャジョー(お菓子)を売りに来るゲン・ビアンが言ってたわ、もうゴドー(ピサン・ゴレン)が作れないって…」などとこぼすのでした。経営が苦しくなったのはジャジョー屋さんばかりではありません。村の小さなワルンでも、ブンクスのための紙やビニール袋、ストローの急な値上がりのために、ブンクスにはバナナの葉、飲み物にはスト

ローなし、というところが多くなりました。ナシ・チャンプルー屋さんだってそうです。米、香辛料、肉までが少しずつ値上がったにもかかわらず、ナシ・チャンプルーの値段は据え置き。そのかわり前と同じ千ルピア払っても、ごはん少し、おかずも少しの寂しい内容になってしまいました。だから今、バリ人たちはナシ・チャンプルーを買う時は、「1,500ルピア分ね!」とか「2,000ルピア分入れて!」とか言って注文しています。特に飼料を輸入に頼っている養鶏は大打撃です。鶏肉も鶏卵も2倍~3倍の値段になって、今や庶民の食卓にのぼることも少なくなりました。ゆで玉子のピリ辛煮がおなじみのナシ・チャンプルー屋さんから姿を消して、エナちゃんも大ショックです。

次に、これなくしてはバリの朝は始まらない、コピ。島内で収穫されるいい豆は輸出にまわることが多いのですが、どう言うわけか庶民が買う分まで2倍以上の値上がり。村人たちがふだんのあいさつがわりに言う、「チョット、コピでも飲んできゃあ!」が、もう聞かれなくなったよ、と冗談半分です笑っていたバリ人もいました。

そして乳製品。原料のほとんどを国外から輸入しているので、バター、チーズ、ミルク類は前の値段のなんと4~5倍! 乳児用ミルクを利用しているお母さんは、たいへんです。「ミルクのかわりにアイル・ティティサン(ご飯を炊く時に出る重湯)を飲ませなさい」と、アドバイスする小児科のドクトルもいるそうですが、赤ちゃんにとってもこの krisis meneter はいい迷惑ですよ。また、お医者さんにかかる時の診察代も1.5~2倍になって、現金収入の少ない家庭は深刻な状況になってしまいました。

つい最近になってとうとうタバコまでが、krisis meneter の犠牲になりつつあります。聞いた話では、政府がタバコの価格変更の公表をしたばかりで、間もなくすべてのタバコが二倍近い値段になるだろうとのこと。ここんとこ禁煙をやめてまたグダン・ガラムを吸い始めたエナちゃんももうプンブンです。バリ人の友人A氏は、「これからはマッチだけを持って歩けばいいさ。タバコを持って人がいたら、すかさず”ミンタ・サトゥ(一本ちょうだい)”だよ。ハハハ」と苦笑いしていました

by エナちゃん

いろんな生活必需品が値上がっても、人々のお給料は増えないばかりか会社が経営不振でリストラの対象になってしまいう人もいたりして、ますます生活が苦しくなる一方です。かと思うと、逆にドル建てで手工芸品を輸出している会社などは大儲けしちゃったりしていますが、まさか、krisis meneterがこれほど庶民の生活に影響を与えるとは皆思ってもみなかったようです。

エナちゃんのお義母さんが、「今度のガルンガンには、今までのように輸入の赤いリンゴやきれいな色のオレンジがお供えものに使えないわねえ。少々高いだけなら、フンパツするけど、こんなに値上がっちゃったらねえ。なんだか生活がひと昔前に逆戻りしちゃったみたいね。」と言ったのが印象的でした。

この天国みたいな島を根元からささえているのは、そんな普通の人々なのです。早くこのkrisis meneterが解決されて、安定した庶民の生活が戻ってくることを、エナちゃんは神様に祈るばかりです。



Illust:Fumio

●ごあいさつ●

読者の皆さん、今年も「極楽通信・UBUD」をご愛読下さってありがとうございます。少しずつ会員も増え、UBUD、BALIに興味を持って下さる方々がたくさんいて嬉しいかぎりです。

さて、Vol.24でもお知らせしたとおり、本誌は今年98年度版を最後に休刊することになりました。1994年から五年間ものあいだ、無償のご協力をして下さったポトマックのほりりさん&えりりさん、執筆に加わって下さった多くの方々、イラストや表紙に作品を提供して下さったたくさんの皆さん、そして、いつ届くともしれない「極通」をカンニン袋の緒を切らさず待ち続けて下さった読者の方々に、おおいなる感謝を申し上げます。

「極通」は、心からBALIを、そしてUBUDを愛する前述のスタッフの面々によって、「え〜っ？ そんなの続かないよ！！」という声をしり目に、大胆不敵にも年6冊出版という強行軍で始められました。その頃はBALI、ましてやUBUDに関する情報は、日本の皆さんにとってたいへん手に入りにくいものでした。「よっしゃ！ じゃあ我々がガンバって！！」と発行に到ったわけです。が、今やこのご時勢、インターネットなるもののおかげで続々と、しかも「極通」より早くあらゆる情報が行き届くようになりました。そんなわけで、来年度からの「極通」は、これまでのスタイルと違ったものを刊行していこうということになりました。まず、定期刊行ではなく、より密で、よりマニアックな内容のものを、じっくりこってり作っていこうと思っています。いつできるかはお楽しみ、その時は皆様にもご一報致します。乞うご期待…

本年度'98年度版はVol.30まで、決して気を抜かず、日本で待って下さっている皆様のお手元にお届けすることを約束致します。どうぞ楽しんで読んで下さいます。

皆様からのご意見、ご希望、その他なんでもお待ちしております。

Terima kasih banyak!!

編集長より愛をこめて

PELENGKUNGAN

バリの人々は椰子の葉や竹などさまざまな自然素材をうまく利用して、持ち前の絶妙なセンスと手先の器用さで美しい飾り物を作ります。供物などもその一つですね。その中でも筆者がちょっと気にかかったのが、写真(A)の飾り物です。

みなさんもきっと村や街角で見かけたことがあると思いますが、これは名称をプルンクガン(PELENGKUNGAN)といいます。これが飾られている場所では、儀式か催事がおこなわれています。たとえば、あなたが友人の結婚式に招待されたとしましょう。あなたはあいにく、その友人の家を知りません。

どこそこのバンジャールのこのあたり、まではわかったのですが…。という時、あとはこのプルンクガンが門に飾ってある家を探せばいいわけです。便利ですね。

寺院など、お祈りするところで飾られているものはクラメアン(KERAMEAN)と呼び、催事の場合は単にデコラシ(DEKORASI=飾り付け)と呼ぶそうです。いろいろな場所で見かけ、まじまじと観察するのですが、一見ただけではどうしても材料と作り方が理解できず、少し欲求不満状態でありました。ところが今回、結婚式を間近に控えて準備に忙しい、あるバリ人の友人の家を訪れて、好運にもそこでプルンクガンの作業工程を一部始終見学することができました。さらに作業にも参加することができたので、その詳しい様子をここで紹介することにしましょう。

材料は、Vol.20で紹介したトゥアック(TUAK)を作るジャコー椰子の若葉・アンブー(AMBU)と呼ばれる部分です。写真(B)で見てわかるように、アンブーは葉が開く前未熟な若葉がひとつになっている状態をさします。これは、まだ若いジャコー椰子から取れるのだと思い、ジャコー椰子の林を見るたびに目を懲らし若いジャコー椰子を捜していましたが、いっこうにアンブーらしきものは見当りません。それでは成長したジャコー椰子なのだろうかと思いましたが、やはり見付けることができませんでした。そして百本



近くのジャコー椰子を見上げ、捜し続け、ついに見付けることができました。ジャコー椰子のテッペンにアンテナのような細い棒が一本真っすぐ上に伸びています。これがあのアンブーだったわけです。残念ながら筆者のカメラでは、その状態を写真におさめることができませんでした。棒のように見えるのは、まだ葉が開いていない状態なのです。葉が開いてしまってからではプルンクガンを作るのに役に立ちません。これは若葉の新芽で、もちろん一本の木に一本づつしかつかないので、捜すのがたいへんだったわけです。この貴重な部分・アンブーからプルンクガンという飾り物が作られるわけです。

ちなみに、ココ椰子もこんなふうには若葉が出てきます。ココ椰子のそれは、バリではブスンと呼び、各種のお供え物の材料になります。

さてここで、プルンクガンの作り方を順を追って説明しましょう。





C



D



E



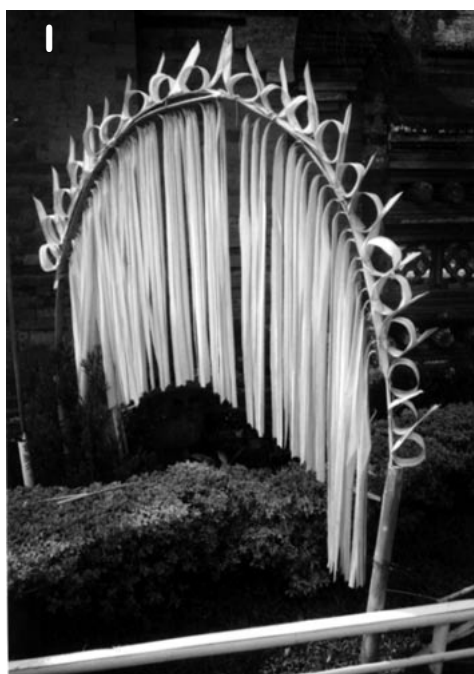
F



G



H



I

写真C：背中を残すように二つに裂きます。新郎となる友人自ら作業をしています（右）。

写真D：寝ている葉を起ししながら、葉の背中に付いている堅い芯をナイフで切り落としていきます。この時、慎重にしないと葉を切り落としてしまいます。切り落とされた芯は、一つにまとめてほうきを作ります。

写真E：最後まで葉を開いたところ。ここまでの所要時間約30分。

写真F：曲げやすいように堅い芯を薄くします。

写真G：飾り付けたところ。これをプルンガンと呼びます。

写真H：こんなふうにかットされたのはオンチェール（ONCER）と呼びます。ほかにもいろいろなカットがあり、それぞれ名称も違うようです。

写真I：グルン・グルンガン（GELUNG-GELUNGAN）と呼ぶココ椰子の若葉で作られた輪のような飾り物をつけたプルンガン。

バリで働きたいあなたへ



Megumi



私がウブドのアグン・ラカ・バンガローに、マネジャーとして勤め始めてから一年とちょっとになります。この間、沢山のお客様から、“どうしたらバリで働けるんですか”という質問を頂きました。昨年の秋には、日本の某雑誌に“バリで働く日本人女性”ということで、何人かの方とともに私も紹介され、見ず知らずの方から“私もバリで働きたい”というお手紙を頂いたりもしました。中には“何でもいいです。仕事を下さい。”というお手紙もありましたがごめんなさい、私には仕事をさしあげる権限はありません。“バリで働きたい”…私もずっとずっとそう思ってきました。“どうやったらバリで働けるのか”それは一人一人ケースが違うので“こうやったらバリで働ける”というマニュアルはありません。これから何回か、私の体験についてお話をさせていただくことになりましたが、あくまでもこれは“私の場合”“私の知人・友人の場合”ということになります。題して“バリで働きたいあなたへ…”

●ビザ取得まで

バリで働く、と一口に言ってもいろいろなケースが考えられます。自分でお店を開く場合と、誰かに雇われる場合と、大きく分けてこの二種類があるでしょう。自分でお店を開く場合、これは信頼できる保証人（スポンサー）を見つけることがまず第一です。私はバリでお店を持っているわけではありませんので、次の、“誰かに雇われる場合”について私のビザ取得までのケースについて、今回はお話することにします。

バリの（インドネシアの）どこかの会社（ホテル、トラベルエージェンツ他）に雇用される場合、ジャカルタの入国管理局（イミグレーション）発行の書類がまず必要になります。そのために雇用主は、雇用したい外国人のプロフィールデータを持ってジャカルタのイミグレに行って、許可申請をしなければなりません。ジャカルタまで行くにはお金がかかります。しかし外国人を雇用するという事は、実はとてもお金がかかるということなのです。これは、雇用主が直接ジャカルタまで来ることが出来ないような会社の場合は、外国人を雇用するだけの余裕がない、と見なされるということらしいです。又、このイミグレ発行の書類が、どのくらい待たばとれるのかということについては、これがなんとも一言では言えないインドネシアらしい事情があるようです。私が以前、日本のビザ代行業者の方に聞いたところでは、“まともにやっていたら1年かかるか2年かかるかわからない”ということでした。まともにやらなければ、すぐ取れるのでしょうか。まともにやらない、とはどういうことなのでしょうか。この辺はみなさんで考えてみてください。もっとも5つ星ホテルなどの場合は、やはり比較的早く申請が通るようです。

ちなみに私は日本にいた時、海外からオーケストラやバレエ団を招聘する仕事をしていました。この場合まず来日するカンパニーすべてのメンバー（アーティスト、舞台監督、大道具や衣装などのすべてのスタッフ、カンパニーマネージャーなど）のプロフィールをカンパニーから日本に送ってもらい、日本の入国管理局の書類に必要事項を書き込んだものに写真を貼付し、それを2部作り、公演の企画書（あればチラシ・パンフレット）、そして会社概要と共に、入国管理局へ持って行きます。窓口で書類を提出すればぴったり、遅くとも1週間で、許可証が発行されます。それはとってもシステムチックなものです。いづれにせよ、この書類は自分で取ることは出来ません。雇用主に任せるしかないので。さて、この、イミグレ発行の書類がスポンサーよりもらえたら、それを持って本人がいよいよビザを申請に行きます。ビザを申請する場所はインドネシア以外の国、です。つまりインドネシアでビザを持って働くには、最初からそのビザで入国しなければいけない、ということです。書類には、働く会社の名前と職種、そしてビザを取る場所などが書いてあります。働く予定の人がもうすでにインドネシアに入国している場合、一時出国として一番便利なシンガポールのインドネシア大使館でビザを取る場合が多いようです。

思いおこせばおとしの12月、私はアグン・ラカさんからこのぺらぺらの一枚の紙を渡されました。それには確かにジャカルタの入国管理局のスタンプらしきものが押してありました。しかし、それはFAXで送られたものだったのです。つまりホンモノはシンガポールのインドネシア大使館にあり、私はFAXまたはコピーを持ってそこへ行く、ということらしかったのですが…しかし、しかし、これってずいぶんいい加減のような気がしたのです。FAXのその紙には私の写真も何も貼ってありません。日本では、写真貼付の本チャンを2部作り、その内の1部を本人に宛ててクーリエで送るのです。本当にこんなだけ持ってけばいいの～って私はなんだか？？？。でもアグン・ラカさんは“ティダ・アバ～”と言うし、あまりに心配になって影武者の伊藤さんと由美さんに聞けば、伊藤さん“ど～やったけねえ～？”、由美さん“これだけ持っていけば大丈夫でないのお～？”…しかし、しかし、私はシンガポールにはまだ一度も行ったことがない。しかも、いくらこれだけ持っていけばいいと言ったって、さすがに大使館に行けば、なにか別に書き込む書類があったり、なにか質問されたりするんじゃないんだろうか。もしそれで、ううっ答えられなかったりして、“あんたはダメ！”みたいなことにでもなったら…。想像は想像をよび、緊張と不安から、バリに通うこと5年、渡航回数11回、今までただの一度もお腹を壊したことのない私が、下痢に苦しむ羽目に。が、しかし！世の中はうまく出来ている！なんとシンガポールには、ビザ代

行業者というのがいたのです！

1996年12月某日、夕刻…シンガポール、チャンギ空港から私は教えられた番号に電話をかけました。それから1時間30分後、ビザ代行業者のミスターIは、その日私が泊まることになったオーチャード・ロードに程近いホテルへ、爽やかな笑顔でやってきました。代行業者にビザの取得を頼めば、本人は何もしなくてもかまいません。パスポートと書類を渡し、ホテルで待っていれば、翌日の夕方にはスタンプの押されたパスポートが本人の手に戻ってくる…という仕組みです。ビザ取得のための正規の料金に手数料をプラスして支払い、かくして私はなにごともなく、あっさりと、スタンプの押されたパスポートを受け取ったのでした。

以前サヌールの某トラベルエージェントで働く日本人女性スタッフと話をしていた時、やはり彼女もビザを取るためにシンガポールに行った、という話になりました。彼女の勤めるトラベルエージェントは、外国人を雇用するのがはじめてで、手続きその他だれもわかる人がおらず、彼女も私と同じようにぺらぺらの1枚のFAXを渡され、“これでビザがもらえるからシンガポールに行っておいで”と言われた、ということです。私が代行業者に頼んだ話をすると彼女はびっくりして、“私そんなの知らなかった”と言います。私が、“だっていくらこれさえ持っていけば大丈夫だと言われても、まさか大使館の入り口で、『これ持ってきました、ビザください』と言う訳にはいかないじゃないの”と言えば、彼女、“あたし、それ、やりました…”聞くとところによると、彼女は大使館の窓口でFAXの書類を出し、「ミント・ビザ」と行ったらいいです。“そしたら窓口の人、なに言っただ、こいつ、って顔して、なにか書き込む紙をくれたんです。それに名前とか住所とか書き込まなければいけなかったらいいのね。だけどその書類、英語だったの。私インドネシア語の辞書しか持っていなかったから、もうまっさお。必死で書き込んでいたら、もう時間だから窓口を閉める、って言うの。私翌日の飛行機でバリに帰るつもりだったから、もう半泣き。”“それで、どうしたの？”“私は明日の飛行機でバリに帰らなければならない。だから今日中にこの書類を提出して明日はビザをもらわなければならない！って、本当に泣きながら、インドネシア語と日本語で言ったの。そしたら窓口の人が私から書類を取り上げて、あとはなんだか向こうで書き込んでくれて…それで翌日、ビザがもらえました。”…なんとかなるものなのかもしれない、本当に、とその時私は確かに思ったのでした。

めでたくこうしてビザを取り、インドネシアに再入国します。でも手続きはこれで終わったわけではありません。次回は、バリで働くために、デンパサールのイミグレーションや警察で行なわなければならないもろもろの手続きについて、お話したいと思います。

正しい出産と育児



by ムーン・ストーンの花嫁

NOMOR 6

■正しいアリアリの扱い方

私が悪夢のような帝王切開手術を終え、麻酔から覚めずにまだ眠っているあいだに、Babyとともに取り出された胎盤が家に持ち帰られた。「えっ？胎盤なんてどうするの？」と思う方もいるだろう。そんな方々にちょっとここで、バリ・カルチャー講座ね。

バリでは出産と同時に、目に見えない四人のきょうだいが生まれてくるのだそう。それは後産の、胎盤、血、羊水、羊膜あるいは臍帯に象徴され、まとめてKanda mpat = カンダ・ンパツと呼ばれる。カンダ・ンパツは、常にその赤ちゃんのそばに寄り添い、死ぬまで守ってくれるのだという。胎盤もろもろは、フタつきの素焼きの壺または小さな黄色いココナツの中に入れ、ムテン（バレ・ダジョーともいう）と呼ばれる家長の寝室の前に穴を掘って埋められる。赤ん坊が男の子の場合は戸口の右側、女の子の場合は左側である。埋めたあとに大きな石をひとつ置き（竹で祭壇をつくる場合もある）、毎日欠かさずことなく数々のお供えものが捧げられる。

おもしろいことに近代設備の（一応）整った大きな病院でも、このカンダ・ンパツのための素焼きの壺を用意していて、お産の後に家族にくれるのである。普通は夫がそれを家でいったん洗ってから埋めるのだそうだが、私の場合はお義母さんがその役目を担った。それを聞いたのはずっと後になってからだったのだが、「どうして自分でしなかったの？」と尋ねると、Dは肩をすくめて「…だって、なんだかコワくって…」と答えた。考えてみるとナマの胎盤というモノを手にとって洗う、というのも相当気色がワルイものであろうと思われる。新鮮な胎盤はうっすら青みがかったレバー色をしている、と聞いたことがある。余談だがホ乳類の胎盤には、コラーゲン（だったと思う）という成分が豊富に含まれていて、栄養学上にも非常に優れたものだそう。だからネコは自分がお産をした時に出て

きた胎盤を食べてしまう。以前、ネコのお産に立ち合った(?)ことがあるが、誰から教えられもしないのにハグハグと胎盤を食べてしまったのには感心した。何も知らない人がそれを見たら、ネコの気が違ったと思ってびっくりすることだろう。さだかではないが、日本及び欧米の高級化粧品には、動物の胎盤から摂ったコラーゲンが使われているという話もある。開発途上国の病院では、人間の胎盤がヤミで売買されているという話も聞くが、いったい何に使うのでしょうか。さて、話をもとに戻そう。病院から受け取ったツボ入りの私の胎盤は、石ケンでもみもみときれいに洗った後、白い布で包まれ、ツボに戻して定位置に埋められた。

ここまでの過程で注意しなければいけないことは、胎盤（バリでは「アリアリ」という）は決して左手でつかんではいけないということである。言うに及ばず、左手はバリ人にとって不浄の手である。私達日本人にはあまりピンとこないが、左手で何かを人に手渡ししたり、左手で何かを指差しては絶対いけない。私はずっと前、お義母さんのお供えを手伝っていて、家寺のホコラのひとつを左手で指差したことがある。それを見たお義母さんはあまりのことに逆上(!?)して、とっさにインドネシア語が口から出ず、ツバをとばしながらあわてて何やらバリ語で私に言うのだが、私は何の事かわからず、そばにいた夫が苦笑しながら注意してくれたという事件があった。もうひとつ、家のウパチャラのお手伝いに来てくれていた近所の奥さん方に昼食をすすめる時、左手で「どうぞ、どうぞ」とやったら、そばにいた伯母にピシリ、と左手をたたかれたこともある。そうやって私は身体で(?)覚えてきたので今はずいぶん慣れた。それほどバリ人達にとっては左手はタブーの手なのである。アリアリを左手で触ってはいけない理由は他にもあって、もし左手でつかんでしまうと、その赤ちゃんは左ききになってしまうのだそう。バリで左ききになってしまったら、さぞ不自由な思いをするに違いない。ふうーん、なるほど、である。

■バリの赤ちゃんに、タコとドラエモン

赤ちゃんの身につける衣類等、バリ独特（他のインドネシアの地域のことはよくわからない）でユニークなものが沢山ある。まずお腹に巻くグリタという布である。これはヘソの緒がついたままの、あるいはヘソの緒が自然に取れた後の患部を保護するものなのだが、普通ガーゼで出来ていて15Cm程の幅があり、両端が5～6本のヒモ状のヒラヒラになっている。「グリタ」はインドネシア語で「タコ」の意である。要するに端っこのヒモ、ヒラヒラがタコの足のようなのでこう言うのだろう。これを赤ちゃんのお腹にくると巻き、両端のヒモを一本ずつお腹の上で結んでいくのである。日本では小さくたたんだガーゼをおへその部分だけにベタリとテープでとめてハイ、おしまい、なのだがこのグリタは非常にめんどくさいものだった。何年も前に、一人でUBUDに住んでいた頃、飼うネコの避妊手術を何匹かしたことがあった。デンパサールの獣医さんにまだ半分麻酔が効いてヘナヘナになっているネコを迎えに行くと、ネコの腹にこのグリタが巻いてあった。その時は、「へーえ、バリではネコの手術のためにこんなモノまで売ってるのね。」とえらく感心したのだが、それが私の大きな思い違いだったことが自分でbabyを産んで初めて分かったのである。誰が決めたか知らないが、バリでは一般に、生後42日めの儀式が終わるまで、このグリタは常に赤ちゃんのお腹に巻かれるのだ。

次に、手袋と足袋。これがおおいに問題となった。babyは産湯につかってからすぐさま、手袋と足袋をかぶせられた。木綿で出来た小さな袋状のものに、細くてゆるめのゴムがついていて、手袋はほぼまん丸、足袋は一応足型の形をしている。日本から友人が送ってくれた育児書には、「赤ちゃんは手のひら、足の裏で体温調節をしています。冬でもミトンや靴下などはつけないようにしましょう。」と書いてある。ご存じのとおりここは熱帯の島である。手術後まだ気力も体力も失せているうちはダメだったが、元気が回復するやいなや、私は待ち構えていたように夫に抗議した。「そんなモノしちゃいけない、って本に書いてあるのよ、暑いでしょうに、早くとってあげてちょうだい！」夫は信じられない、という顔をして、「何を言ってるんだ、これは42日めのウパチャラが終わるまでとってはいけないんだぞ」42日だって！？ そんな事誰が決めたのだ？！ 「バリではそういうadat（ならわし）なんだ」と、取りつく島もない。「だって本に…！」「それは日本の話だろう？！ ここはバリだぞ」…もう返すコトもない。夫によると、その生後42日めのウパチャラまで、ツメも切ってはいけない、伸びたツメでbaby



Illust:Fumio

が自分の顔をひっかいては大変だ、それに赤ちゃんは寒がりだから手袋・足袋は絶対しなければいけない、と言うのである。無理矢理自分の意見を押し通そうと思えば出来たかもしれないが、そんなことでこれからずっと家族から白い目で見られるのも悲しいので、くやしいがこの件は私が折れて夫に従うことにした。手袋・足袋をしたNikは暑くてかわいそうだがどことなくどらえもんのように、そんな手足をバタバタさせていると、これがまたとてもカワイイのであった。そんな初孫の写真をさっそく日本のおじいちゃんに送ることにした。バリ→日本の普通郵便は思ったより早く着き、1週間もたたないうちに早速父から国際電話がかかってきた。「お…おめでと、やっと生まれたね！」と言うその声はどことなく暗い。どうしたんだろう、と思ったら父はこう言った。「写真…、見たよ。正直に言ってくれんか。なに、お父さんは驚かんよ。そういうこともあるもんだでな」「一体何の事言ってるのよ、お父さん?!」「手と足に…、どんな障害があるんだ?」…?!★!?日本では見慣れない手袋と足袋をしたNikの写真をみた父は、それを障害をかくすためにしていると大カン違いをしたのであった。この話を家族にしたら大ウケであった。そして同時に、外国ではこんな手袋・足袋をしないのだという事を家族の皆は初めて知ったのである。

■母は強くなるべし

赤ちゃん用品の事件はまだ序の口である。妊娠中には思ってもみなかった数々の困難を私は乗り越えなけ

ればならなかった。それに加えて手術のあとの痛みである。おっばいの出も相変わらず悪く、看護婦に相談しても、「ミルクあげればいいのよーん」って感じで相手にされない。不安とあせりのあまり、涙が出てきてDにすがりつこうとすると、「ティダ アパアパ〜！ 子供産んですぐにメソメソするんじゃない」と厳しい一言。男にはわからないのだ、この繊細なハハゴコロが。Dがお産の翌日、一度帰宅するというので、入院の準備を何もしてこなかった私は紙にこまごまと、あれこれ家から持ってきて欲しいものを書き留めてDに頼んだ。2〜3時間後、大きなビニール袋をさげてDが戻ってきた。中を見て、私はガックリした。頼んだ物と全く違う物が入っていたのである。化粧水を頼んだはずが日焼け止め用乳液、生理用ショーツを頼んだはずが普通のビキニ・パンティー、パジャマを頼んだはずがTシャツとよそいき用のドレスパンツ、といった具合である。こういうものって男に頼んでもわからないものなのね…トホホ。ますます力が抜けてくる。3日目の昼にはおしっこを取る管がはずされ、いよいよ自力でトイレに通わなければならなくなった。足を一歩踏み出すごとに激痛が襲ってくるので、そろ〜りそろ〜

りと、ロボットのようにぎこちなくトイレまでたどり着くと、今度は自分でパンツがおろせないのである。ほんの少しでもかがもうものなら傷がバククリ割れそうに痛い。それなのに、ドクトルは「どンドン歩いて慣れなさい。うん、この傷の様子だと、明日には退院してもよいだろう」と、ニヤニヤしながら言うのである。そ、そんなあ〜、腹を切ってまだ72時間しか経っていないのに、もう明日には退院せよというのである。言語道断、泣きっ面に蜂、極悪非道…。私の頭の中はショックで真っ白だ。聞いてみると、普通分娩でも帝王切開でも、普通のバリ人は3日程度で退院してしまうそうだが、日本だと2週間が目安といわれ、入院中には赤ちゃんとお母さんの身体の検査、新米ママのための育児教室など盛り沢山のケアでいっぱいなのである。それがどうだ、ここではな〜んにもしてくれないあげくに「はよ、うちへ帰れ」と、3日で放り出されるのである。ここでは強くなければ生きていけない。弱者は容赦なく置き去りにされる。泣いてばかりいてもおっばいは出ない。自力で踏張って、強くなっていかなければ…。このbabyはバリ人として、そして私はこの子の母として、ずっと、これからこの島で生きていくのだから。



Illust:Fumio



■純情とは…

Denpasar に住む Lutfi 君の話。彼がまだ高校2年生の時のこと／Ketika masih duduk di kelas dua SMA. ほとんどの生徒と同じように、彼も英語の授業は大の苦手だったようだ。しかも“これが時間割り最後の授業ときているのでやる気はなくなるわ眠くなるわ／Pelajaran ini diletakkan pada jam terakhir, sehingga membuat kami sering malas dan mengantuk” まあ、英語に限らず学校の授業とはだいたいそんなものである。びんびん坊が高校生のときなど、授業中はおしゃべりしているか、おとなしく眠っているかのどちらかだった。あるときなど、恐ろしい夢をみて寝言に大声はりあげ教室中の爆笑をかったこともあった。青春とは眠いのである。

その、眠くて大嫌いな／paling aku benci 英語の授業の行なわれていたある日、“どうしてか分かんないけど、その日は異常に眠くて、ほとんど居眠りしそうになっちゃって／Entah mengapa, aku pada siang itu mengantuk luar biasa dan hampir tertidur” 襲ってくる睡魔を払いのけようと、紙に“イタズラ書き／corat-coret”をしていたLutfi君、ふと気付くとわきに教師が立っている。“どうやらさっきから、授業に身を入れてないほくを観察してたみたいなんだ／Rupanya dia sejak tadi memperhatikanku yang tak terkonsentrasi pada pelajaran”そして、先生お決まりのセリフ“なにしてんだ／Sedang mengerjakan apa?”

あわてて紙を隠そうとしたけれど、そこはそれ百戦錬磨の先生だもの、Lutfi君が隠すよりも早くサッと紙をとりあげてしまったのである。“なにを書いたか知りたい？／Mau tahu apa yang kucorat-coret?”と、Lutfi君がびんびん坊に尋ねた。もちろん知りたいですよねえ、皆さん（ま、想像はつくけどね）。

“I Love You, Nina”

Ninaちゃんというのは、当時／saat itu 彼らのクラ

スに転入してきた女の子で、“しょっちゅう男子生徒のターゲットになっていた／sering menjadi incaran banyak teman laki-lakiku” Lutfi君も例外ではない。授業中好きな子の名前をノートの片隅に書く、誰にでもどこにでもある青春の風景だ。しかしLutfi君の場合、そんな呑気なこと言ってもらえない。いまや“アイ・ラブ・ユー、ニナ”は教師の手の中にある。

“Betapa malunya aku waktu itu. Badanku terasa panas dingin dan mukaku pucat seketika/ どんなに恥かしかったことか。体は熱くなったり冷たくなったり、一瞬のうちに顔面蒼白になったよ”

追い討ちをかけるように先生が言うには、“前に出て、みんなに分かるよう大声を出して5回読んでみろ／Coba kamu bacakan di depan kelas sekeras-kerasnya lima kali, biar semua orang tahu” さあ大変、もうほとんど“雷に撃たれたような気分／hatiku seperti disambar petir”

日本語で言えば「まな板の鯉」「清水の舞台から飛び降りる」といったところか。

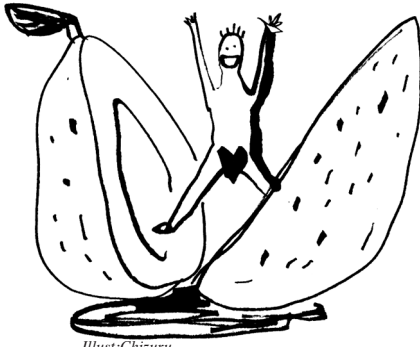
Lutfi君やむなく教室の前に進み出た。“dengan berkeringat dan gementaran/ 冷や汗をかき震えながら” “Aku berusaha cuek/ 気にとめないふうを装って” みんなの前で5回叫んだ。アイ・ラブ・ユー、ニナ、と。

Ninaちゃんがどんな表情で聞いていたのか、それは彼にも分からなかったようだ。

■純潔とは…

男の「純情」とくれば、女だって「純潔」で勝負とばかり、処女性にこだわる（大切にする、と言うべきか）女性の話。といっても、今回は予告だけ。乞うご期待！





Illust: Chizuru

(6) カカエンで飛び入り参加

ユキ

は寂しい、とまで思うようになってしまった。ちょっと賑やかなくらいがいい。たまにウブドの自分の部屋に帰った時なんて、静かすぎて寂しいくらいだ。人間って、郷に入れば郷に従えるものなのだなあ。それとも単に、私がバリ人化してしまっただけなのだろうか…？

そんな風だから、デンパサールのコスでは不便を感じるどころか最近では愛着さえ感じてしまっているのだが、相変わらず週末にはウブドに帰るという生活を送っているのにはわけがあった。両隣に住む彼女達がやはり週末になると、「カ・カ・エン」だ。」と言って、3人揃って出掛けて行ってしまふからだ。

…カ・カ・エン？ なんだそりゃ…？？ はじめて聞くその言葉の意味が理解できず、彼女達によく説明してもらおうと、実はこれは「K・K・N (カ・カ・エン)」という略語であった。Kuliah Kerja Nyata. 日本語に訳すと、校外実習。S・T・S・Iでは、セミスター7になると、舞踊科の子は踊りを、演奏科の子はガムランの演奏を地方の村に教えに行くという授業があるのだ。毎年行く先は変わるらしくて、今年はクルンクンなのであった。生徒らは3つのグループに分けられ、それぞれ別の村へ教えに行くらしい。もちろん教える対象はその村の子供達で、女の子にはプスパン・ジャリ、男の子にはバリス・ゲデを教えることになったそうだ。たいてい金曜日の午後、彼女達はバイクで出掛けていく。そして土曜、日曜日と向こうで泊まってきて、またコスに戻って来るのは月曜日の朝。別に泊まらずに家から通ってもいいらしいが、それではやはり疲れるのだろう。だから週末になると、コスの両隣の部屋はスピィ・スカリ (とっても静か) になる。仕方がないので特に用事がなくとも、私もウブドに帰ることになる。あーっ、つまらない。最近では、デンパサールの方が居心地がいいというのに。

「さっさとK・K・Nなんて終わっちゃえよー。」
私にとっては、K・K・Nなど全くのひとごとなのであった。

ところが、そんなある日のこと…。

「ユキッ、D君が今度の日曜日のK・K・Nのペンタスでユキに踊れって言うてるよ。ユキ、マウ？ (踊る?)、マウ、ヤァ？ (踊るわよね)、ハルス・マウ！！ (踊らなくっちゃあ！！)」

「ユキーッ！ブプール・カチャンヒジョウ屋が来たよお、買うー？」

練習から帰ってきて、うだうだとベッドで寝ていたら、部屋の外からNの呼ぶ声で目が覚めた。

「買う、買う！！」

ブプール・カチャンヒジョウは私の大好物。ねばけまなこであわててベッドから飛び起きて、ドアを開けてみると、NもIもSも3人揃ってブプールを食べている。

「あー、起きたばっかでしょう、ユキー。」

「へへェッ」

時計を見るともう夕方の4時半すぎ。すると私は2時間近くも寝ていたのか。あーあ、またやっちゃった…。だけど練習後の昼寝って、気持ちいいんだもん。私もブプール・カチャンヒジョウを一つ注文して、彼女達と一緒にテラスのイスに腰をかけ、雑談に加わった。ペチャクチャ。ワイワイ。こうやってみんながそろって、ゆっくり話をする時間って、一日の中で以外と短い。朝は全員そろっているけれど、ばたばたと出掛ける準備で忙しいし、学校から帰ってからは、昼寝をしているものやパチャールの所へ行っているもの、友達と遊んでいるもの、私は練習から帰って昼寝していたり、とにかく皆さまざま。昼寝から目が覚め、夕方のマンディをする前の、こんな午後のひととときに、ようやくコスの子全員が顔をあわせるのだ。そうして、そんな時には、ペチャクチャひまつぶしの雑談をする。私は彼女達とそんな会話をするのが大好きだ。他愛のない話で、笑ってふざけたり。私の語学力の無さのために、必然的にそういうレベルの会話になるんだろうけれど、私は結構それを楽しんでいる。なかなか一人の時間を持ってないことにイライラしたり、気を使いながら彼女達と話す事に気疲れてた、はじめの頃が嘘のようだ。今では、(信じられないことだけど)彼女達が居なくて

学校から帰ってくるなり、Nが私に向かってそんな事を言うではないか。

「えー、ちょっと待ってよ。何それー？」

わけが分からずしどろもどろになりながら、私は一体、そのペンタスって何なのかと聞き返した。

「だからね、今私達が教えている村でオダランがあるから、そこでナヤツ（お寺に奉納の踊りをささげる）をすることになったの。みーんな私のグループの子達は、演奏と踊りで参加するのよ。もちろん私もね。で、ユキも踊れてD君が言ってるの。ね、踊るでしょ？踊らなくっちゃあ、ダメよ！」

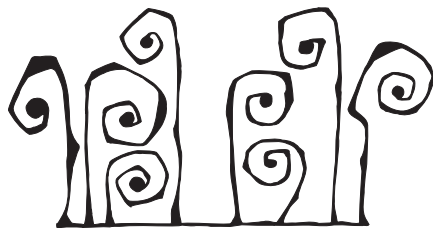
D君というのは、プンゴセカン村に住む以前からの知り合いだ。彼に誘ってもらっているのなら、尚更、断る理由もない。でも…、それにしても突然なんだから。今度の日曜ってあさってじゃん。

次の日の夕方、マス村のR君が私のコスに訪ねてき

て、当日（つまり明日）は、マス村までバイクで来てくれば、クルンクンまで送迎の車があるから、それに乗って一緒に行こうと言ってくれた。衣装とかも全部、学校から借りて用意してくれるのだそうだ。

「じゃあ、ユキ、明日クルンクンでね」

そう言い残して、Nは一足先にクルンクンへとバイクに乗って出掛けて行った。私はとりあえず、今日のところはウブドへと帰ることにした。



読者の皆さんからたくさんの方のあたたかい声をいただきました。

通信欄から

■矢島晶子

いつも送ってくださってありがとうございます。毎回とても楽しみにして待っています。（そのわりにはお便りしなくて本当にスママセン！）終わってしまうのは残念ですが、次の方も必ずお願いしますので、またステキな本を私たちに送ってください。

■西村久美子

「極通」後もUbudから届く、何らかの情報ツールがあるとうれしいです。Baliのにおい、送り続けてください。

■成田綾乃

今年でお休みにってしまうなんて淋しいです、とても。でも、これまで、毎号楽しく読ませていただきました。本当にご苦労様です。今年いっぱい、どうぞ頑張ってください。

■野村おかる

今年度で休刊はとても残念ですが、来年以後の活動に期待します。ありがとうございました。

■岩谷宏

突然の休刊の知らせでびっくりです。ぜひとも早く後刊を望んでいます。パリに行きたくとも行けない者のためにも、ぜひよろしく願います。

■近藤ゆかり

今年度で休刊なんてさみしいです。でも最後までがんばってください。応援してます。

■酒井美奈子

いつも楽しく読ませて頂いています。来年度で休刊されるのは残念です。私はインターネットをやったことはありませんが、はるばるパリから私のポストに封筒が来ている喜びは、情報を手に入れるよりも、私にとっては大切なものなんです…。とにかく、また一年間よろしく願い致します。

■中山久仁子

「極通」が休刊になるという噂は本当だったんですね、さびしいです。でもまたきつと、新しい企画で継続お願いします。いつも極楽通信が届くたびにBaliの風を思いだしている私なので、今後ともよろしく！

■長村敦子

いつも極通が届くのを楽しみにしています。そしていつも次はいつUBUDに行けるかなあ～と思ってます。今年は4月に転勤があって仕事も変わるので、なかなか行けないかもしれませんが…。だからこそ「極通」で少しでもBALIの風、UBUDの音を感じたいです。

■時田満雄

99年以降はスタイルを変えるそうですが、UBUDの情報として詳細な地図や何人かの方々が連載されたバリ日記が楽しいです。98年度版も最後まで楽しみにしています。

■佐野由樹

極楽通信、あと1年頑張ってください。本当は永遠に続く事を願っておりましたが…。休刊後の極通スタッフの方々のさらなるご活躍を期待しております。

■鈴木澄子

1998年限り…（エ～～!?）その先もよろしく願います。

■石井真利奈

APA KABAR? 今回の極通は今までの中で最高に内容が充実していてBAGUSでした。TAPI、その極通が98年をもって休刊するとは…、とても淋しくなります！日本に帰ってくるとどうしてもたとえ2ヶ月に一度であってもBALIの情報は欲しいものデス！又、違う形でのリニューアル期待してます。

バリ日記 (3)

ウブド大好き!

渡辺一郎 & 小堀桂子

2回目のバリ / その2: 1996年4月28日~5月4日

■ 1996年5月1日 (つづき)

朝食は紅茶 or コーヒーと目玉焼きのせとースト、フルーツサラダ。食べている途中で、目玉焼きをズボンの上に落としてしまう。ぎえ~!! 朝食を味わう間もなく、ワンピースに着替えてズボンをつまみ洗ひする。

予約をするのが面倒くさかったので、あらかじめ当りをつけておいた方のマッサージ屋に行く。小さな門をくぐると、庭にいくつかの安ホテルの部屋が並んでいる。

おばちゃんに2人と告げると、そのホテルの部屋の1室に案内される。が、何だかコワくておもてで2人で待つ。極通マッサージマップのコメント(ヨボヨボのおじさんがやってくれる、昔ながらのマッサージ)どおり、ヨボヨボのおじさんがシートと、何かビンに入れた液体を持って部屋に入る。用意をする音が聞こえ、それがやむと部屋に入れ、と言われ、桂子入る。ドアが閉められる。一郎も慌てて一緒に入って来てくれる。

いきなり服を脱げ、と言われ、パンツ1枚に。(桂子)

桂子は夫の目の前で、自ら進んで脂肪100%の裸身をさらけだす。まあ、相手はヨボヨボのジイサンだからいいけど。(一郎) あぐらをかいて座り、びんから怪しげな液体を身体に振りかけられる。げー、くさい!! バリのマッサージはいい香りのフラワーオイルでリラックスゼーション、とかいうのじゃなかったのか! 酸っぱいような、にんにく臭いような、何とも言えない匂いにむせて、せき込んでしまう。(桂子)

せきこみながらも夫以外の男に裸身をまさぐられる快感と罪悪感のせめぎ合いに…。ナンノコッチャ。こんなマッサージの情景を真横からライカで撮影。F2, 1秒。ライカは作動音が静かでええのお。20枚ほど撮る。快調。しかし! これはバリの黒魔術か! カメラの底ブタがなぜか開いてしまい、3/4ほどをだめにしてしまった。悲劇でんなあ。(一郎) マッサージは肩、背中、と続き、頭にも液体をかけられ、耳の中にも入れられる。でもさすがに鼻が慣れたのか、最初のせき込むような感じはなくなっている。あおむけに寝転び、目をつぶっていると、口を開けると言われ

る。何も考えずに開けると、ゴボゴボゴボとその液体を注ぎ込まれる。飲みなさいというジュースチャー。えーい、仕方ない。ごっくん、うげげげげ~。そして最後には、手のひらにその液体をのせられ、鼻から吸い込んで飲み、と言われる。おじいちゃんの言葉には確固とした自信があり、私はまな板の上の鯉。(豚?)

従うしかないのだ。

はー、すごい体験だった。でももう2度とやりたくない。身体はべつにいい、という感じ。一郎は腰が軽くなったと言っている。そりゃ、よかった。こんな思いをして、2人とも「べつにいい」じゃあんまりだもんな。2人で30,000Rpを払って帰る。

酔くさい匂いを2人して全身から漂わせながら、全速力でホテルに帰りシャワーを浴びる。おじいちゃんごめんね。あなたにとっては大切な液体でも、私たちこの匂いはだめなのよ。着て帰って来たワンピースもパンツも、全て洗濯をする。

昼ごはんへ。まず、その前に自転車をレンタル。去年は道端の兄ちゃんに2日2台15,800Rpで借りたので、今回は店からちゃんとしたのを2日2台で20,000Rp(1000円)ぐらいで借りたいと思っていた。ホテルのニョマンは、ホテルのは1日1台7000Rp、2日2台で28,000Rpとのたまう。話になんねー。ホテルから程近いジャラン・モンキーフォレストにFOR RENTの札の自転車。1日1台5000Rpだが、2日2台で18,000Rpでいいと言う。それを値切って16,000RpでOK。ラッキー

去年「影武者マップ」を見て行き、ベジタリアンのナシチャンプルーがすごく美味しく、雰囲気もすごく良かった「モンキーカフェ」に行く。が、行ってみると改装中で『CLOSED』。片言の日本語の兄ちゃんがどこからか現れ、「2~3週間後には開きますので、また来て下さい」とにこやかに告げてくれる。2~3週間後なんて、私たちウブドにはないのよ。一郎はこの2~3週間後というのを2~3時間後と聞き間違えていて、後でまた来れば良いと思っていたらしい。……。 (うるせえ) とりあえず昼ごはんである。時

間はもう2時過ぎで、場所を迷っている余裕はないのだ。で、ぱっと浮かんだのが『クブクー』。吉本ばななの本や、ABロードのグルメブック等、けっこういろんな本に紹介されている、まだ行ったことのない店。よしっ、ここにき～めた。

ナチュラルな雰囲気のある看板。向かいには楽器屋を併設したレストラン。一郎は、楽器屋レストランが気になるようだが、まあ今回はとりあえずクブクーにしようよと、店に入る。

入って、びっくり。広がる田園、あぜに植えられた花、ばななの葉で作った帽子をかぶった道祖神を見下ろすようにL型に並ぶ高床式のお座敷が並んでいる。そこに靴を脱いで上がり込み、田園に向かってしつらえてある長細いテーブルに、並んで座るのだ。静かな竹ガムランの音色が流れ、風が吹き、竹の風鈴がからりと静かに時を刻んでいる。先客達は言葉少なに話をしたり、読書をしながらくつろいでいる。この店は、ゆったりと流れる南の島の時間を楽しむ店なのだ。

最初はその雰囲気戸惑ったものの、空いた座敷を見つけて上がり込む。吉本ばななの旅行記の所々に写真が添えてあるのだが、なんとこの席から見えるこの景色、あの本にある写真そのままじゃないの。あまりにもカンベキな風景。バグース。

店の人は、料理一品一品運んでくるごとに「ゆっくり楽しんでね」と微笑んで置いていく。ナシゴレン、ベジタブルカレー、サラダ、ピンタンスモール、念願のアボガドジュース。アボガドジュースはバナナがちょっと入っていて美味しい。ナシゴレンはチャーハンのはずなのだが、なぜかベジタブルカレーと寸分違わず、これは『?』。オーダーミスかな。でも美味しいから許す。

去年『影武者マップ』を見て、必死に捜して行った『景色のいい渓谷』にもう一度行くことにする。去年は行き過ぎて、迷って迷って行ったのだが、今年は道が解っているからカンタン。と思ったのだが、やはり行き過ぎてしまう。後からわかったのだが、去年はがたがた道だったのが今年は舗装されていて雰囲気がずいぶん変わってしまったのだ。でも渓谷は去年のまま。いかにもウブド、という景色が広がる。けどこのすばらしいのは渓谷の景色だけじゃないのだ。一見ただの苔むした石の壁に、よく見たらレリーフが掘ってあるのだ。去年は見つけられなかった仏様や、妊婦、胎児のレリーフも見つかった。レリーフの一部は、苔がきれいに落としてある。ここはガイドブック等には載ってなくて、いつ、何のために作られたのか等のことは全然わからないのだが、載ってないが故に訪れる人もなく、それがいいのだ。だから苔を落としたり等の、手はなるべく加えてほしくないなあ、と思う。

オバアちゃんがマンディ(水浴び)しに来る。邪魔をしないように、余り近寄らないようにする。

レストラン・影武者に行く。去年来た時に年間予約した

『極楽ウブド通信』の今年の通信費を払いに来たのだ。が、影武者、昼休み。ガーン。ヒッピー風の人が店の中から現れ、聞いてみると、オーナーの伊藤さんの家まで案内してくれる。この人は大原さんという人で、私たちが旅に出る直前に発刊され、伊藤さん達がウブドを中心に書いた新潮社のとんぼの本のシリーズ『バリ島 楽園紀行』にイラストをちょっと書いている人なのだそう。伊藤さん、マンディ中。出てこられるのを待って、突然訪ねたことを詫び、その後一時間弱ほどお話。

- ・『極楽ウブド通信』や『バリ島 楽園紀行』等を読んで、スマラ・ラティーを見るのを楽しみにしていたこと、見れなくてすごく残念だったこと。
- ・滞在中にやるものでオススメのダンスはないか。
- ・『バリ島楽園紀行』に載っていた、日本人向けのインフォメーションセンター・APA?のこと。最近増えつつある日本人の観光客がウブドの人と共存しながらウブドをより楽しむために情報の提供場所を作ったとのこと。
- ・今日から近くのサムアン・ティガ寺院でオダランがあるとのこと。本当は3日ぐらいからが本番でおもしろい出し物もあるのだが、私たちはちょうど帰ってしまう日なので残念。
- ・段々減ってしまっているウブドの自然のこと。ウブドに住んでいる人が便利になるのを望み、そうになっていくのは仕方がないけれど、観光客がクーラー付きのホテルやレンタカーを使いながらウブドの自然が減っている、などと言うのは許せないなあ。

等々。桂子と伊藤さん記念撮影。最後に伊藤さんの左腕のパロンの入れ墨を見せてもらう。

近くのサ店に入り、レモンジュースとコーラを注文。レモンジュースはいかにも今絞りましたというような、フレッシュな味。でもコーラの方が高いのだ(ジュース1000Rp、コーラ1200Rp)。さっき、伊藤さんに聞いたオダランをどうするか話し合う。バリにいる後2日の間に何かひとつ、これ、という体験を味わって帰りたい。でも伊藤さんのオススメできるダンスは、私たちの滞在中にはないよう。だからオダラン行ってみて、何があるのかは良く解らないけれど、とにかくバリの村のお祭りを体験してみよう、ということで意見が一致する。

『極楽ウブド通信』にも『バリ島 楽園紀行』にも、オダランに行く時は服装に気をつけてほしい、できればバリの人達と同じように正装した方が良いという程に書いてある。バリのお寺に入る時用に買ったサルンを巻くだけではだめかをAPA?で聞いてみようということになる。

APA?はナント今日の昼、改装中でお昼を食べ損ねたモンキーカフェの隣にあった。それもモンキーカフェが改装中だと教えてくれた兄ちゃんがAPA?のスタッフのニョマンさんだったのだ。あの時はおながすいていて、APA?等目に入っていなかったのだ。サムアン・ティガのオダランの話をする、誰に聞いたのか、と嬉しそうにた

ずねる。伊藤さんだと言うと、納得した様子。服はやはり正装が良いとのこと。APA?でレンタルができ、それで儲けようとスズメているのかな、と、ちょっと疑ってみるが、レンタル代は1人1泊2日5000Rp(250円)と驚く程安い。日本の感覚でいくと、レンタル後のクリーニング代も出ない値段だ。何だか申し訳ないくらい。安くしておいて、みんなに借りてもらいやすくして、ちゃんと正装をしてオダランに行ってもらおうという、APA?の姿勢が見える気がする。行く日は、段取りがあるので明日がいい、とのこと。服だけ借りて、タクシーでも行こうと思っていたので、何だか『?』。タクシーも手配してくれるとのこと、友人にTELして聞いてみたら50,000Rpとのこと。ちょっと高いかなあ、と40,000Rpに値切る。では、明日の4時に、と言って引き上げる。

ホテルまでの帰る道にあるカセット屋に寄る。一郎は伊藤さんから仕入れた情報のスマラ・ラティーのCD2枚と、ジェゴグのCD2枚(90,000Rp!!)を買う。

夜はカフェワヤンへ。ここはどのガイドブックにも載っている、超有名なお店。満員。庭の中の席希望を伝えると、5分待て、と言われ、立って待たされる。その間に先客がお勘定。でもせかしているみたいで気が引ける。ちょっと一郎、ご機嫌ナナメ。わっ、ヤバイ。やっと着席。注文。ビンタンビール、春巻、ベジタブルスープ、ナシチャンプルー、ガドガド、ココナッツケーキ、エスプレッソコーヒー、紅茶。緑が豊かな庭に、緋の布がさりげなく飾ってある雰囲気の良いお座敷なのだけど、いかんせん接客態度がイマイチ。味もまあまあだけど特にすごくおいしい、というものはない。何だか残念。ここもロータスカフェのように、観光バスで乗りつける、味も、バリの豊かなホスピタリティも感じられない店になっていくのかねえ(そうしたのは私たち観光客なのだけど)。(桂子)

■ 1996年5月2日

自転車で“アルプスの少女ハイジ風の丘”までサイクリングだ。途中何度も迷ってしまう。イライラ。某ホテルの敷地内に「to the hill」と書かれた看板を発見。ダラダラと階段が崖下まで続いている模様。ズンズン階段を下って行く。でかいガジュマルの木があらわれる。傍らには由緒正しそうなプラがある。日本でも鎮守の森には老木はつきものだが、このガジュマルの木はバリの闇を支配する魔女ランダにも似て不気味でんなあ。このプラはウブドで最初に建てられたという由緒正しい&格式の高いグヌン・ルバ寺院ということが後で判明。その格式は“たとえ観光客でもバリの正装せにゃあ、あきまへんでえ”と看板にあるほどのものだ。短パンの桂子はおじけづいたのか、お寺に入ろうとしない。ま、バリ人にとっては聖域だからなあ。短パンではだめでしょね。

お寺の門に配置されている金剛力士というか毘沙門天というかそんな石像を撮影。寺を後にして丘に続く小道をズンズン登る。丘は山となり、やっと“アルプスのおばさん風の丘”らしくなる。丈の長い草の山道をズンズン登る。他の山道から欧米人のカップルもズンズン登ってくる。頂上?で彼らと合流する。ハァーイ!あついねえ、赤道直下だぜえ!桂子は水筒の冷水をお勧めしている。このカップルは我々が日本人とみるや、キャノンが調子わりい!とクレーム。電池が古いじゃないのお、と答えれば、それは新品だ、と負けていない。とりあえず日本カメラ業界を勝手に代表して謝罪しておきました。彼らがフランス人だとわかると桂子は豹変(豚変?)し、「お水なんかあげなきゃよかった!」などとのたまう。どうもフランス政府のアホな核実験の強行政策と、目の前にいるフランス人カップルを近藤正臣し、ポーズ憎けりゃ袈裟まで憎い方式で対処しているようだ。半分、冗談だってば。日仏交渉は決裂し、彼らは更に奥地へ去って行った。ほんじゃね。

この頂上?は見晴らしは確かにすごくいいのだが、唯一にして最大の欠点、それは、日差しをささざるものが一切ない、ということだ。赤道下の日ざしはハンパじゃない。あづい~~~~のだ。もう帰ろうっと。

また自転車に乗ってメインストリートでウブドの東部へと向かう。去年もひやかしたことがあるバリの民族楽器屋は、儲かったのかエスニック・グッズ、書籍などと営業範囲を拡大させていた。店員も、さえないバリのおっさんからOGらしき迫力おばさんになっている。

「ウォルター・シュピースの本はある?」「その本は世界で1冊しか刊行されておらず、当店には在庫なし」との明確かつ簡潔なお答(というような事を言っていたように思う)。桂子は桂子でイルカの風鈴を購入。音階のでる金属パイプからできており、風が鉄琴の調べを奏でるオツなキンコンカン。今回のオミヤゲの中で一番すばらしかったものだ。留守中の猫シッターをしてくれた友人や、桂子の友達の資格試験合格祝いに、そして友人の結婚祝いにも後で買うことにする。

またギイコギイコ。最近やっとウブドにできたというスーパーマーケットへ。ウブドはデンパサルやサヌールといった都会と比べてまだ購買層が貧しいのか、品揃え/品回り共にあんまり良くないみたい。といってもやはり異国のスーパーだ。チープでへんなものが搜せばけっこうある。

桂子は毎月ご愛用のパンツの通信販売会社・フェリシモのアジア・エステグッズのカタログを日本から持参して、インドネシア美容石鹸を物色中だ。なんでもおっぱいの垂れたのを治すとかのプキミなシリーズらしい。日本で買うより何倍もオトクなのだそう。執

念は恐ろしい、なんとその石鹸をみつけよった！しかし悲しいかな、箱の表記は全てインドネシア語、わからへん。英語が通じそうな店員を捜し出し、その店員はインドネシア語しかわからぬ同僚にまた聞きし、日本語・英語・インドネシア語の石鹸談議が30分以上続く。渡辺はあまりの凄まじさにあきれたほういず。とにかくこの場から魔霊退散。スパイス・調味料売り場めぐりといったアジアのスーパー探訪の正道に単独で戻る。(一郎)

ちなみに桂子買ったのはおっぱいが垂れたのを治すやつではなく、インドネシアの漢方薬『ジャムウ』を使ったボディスクラブのセット。カレー粉のようなジャムウをローズウォーターで溶き、身体に塗りたくってマッサージ。シャワーで流すと心なしか黄色くなっている肌をセットのソープで洗い流すと、一皮むけたようにピカピカの肌になる、はず(だったが、別に)。ちなみにその2回分のセットを通販で買えば2500円、バリで買えば700円。そりゃ、夢中になるわな。(桂子)

石鹸売り場に戻ってみれば、石鹸談議はまだ続く。エエカゲンニ、セエヨオ！スーパーの後は、カキューで昼食。ここは地元の人達の大衆食堂、といったところ。イメルダ夫人風のファンキーなおばさんがキリモリしている。メニューは“おまかせオカズ飯”、ナシ・チャンブルー一品のみ。頼むとすぐに出てくる。うめえ！ツーリスト向けのマイルドな薄っぺらい味なんかでは断じてなく、スパイスギンギン辛くて濃い味、ガンガンご飯をかっこみましよう風の下品でしたたかな味だ。結局渡辺にとってはこのメシが今回一番ウマクッタ。が、脳はウマイと感じても、内蔵はウマイと感じなかったらしい。後でおなかグルグルに。

とりあえずホテルへ帰ってマンディ。3:40頃APA?へ。オダランに行くためのバリ正装を貸してもらおう。そこへバリ正装でキメた、すげえカッコイイ(と同性の私でも思えるほどの)美青年がスーパーカブで登場。今回同行してくれる人だという。名前はマデ君。名刺にはペインターとある。彼の家で着付けをしてもらうためにバイク2人乗り。桂子はAPA?のスタッフのニョマン君の後ろ。ウブドを南下する。

お着き。金持ちそうな家。お弟子さん?らしき人の住む庵も散見す。なんとここはギャラリー&アート・スクールでダンスも教えるという。「コレハ、オニイサン」と全紙大に引き伸ばされた写真を指さす。え?この戦士出陣の緊張と不安を鼓吹するようなキメのポーズは?パリス・ダンスじゃないのお?もしかしたら兄貴はパリス・ダンサーなの?へえ~~~~~

渡辺はマデ君に、桂子は妹に着付けをもらっていざゆかん。兄貴の運転で隣の村のオダランへ。

祭りはすげえ規模だ。日本の祭りと同じようにさまざまな出店が祭りに俗の活気を発散させている。しかし寺の中に一旦入れれば、そこは完全に聖の世界だ。寺の

中にはたとえバリ人でさえ、正装をしていなければ絶対入れない。欧米人の観光客が、イ〜ジ〜な服装をチェックされ、退場させられているのを目撃す。我々は一応、正装のまねごとをしているからお寺の片隅に居させてもらっている。これはバリ観光のショーではなく宗教行事なのだから厳しい厳粛さはあたりまえなのだが、いざ現場に出てみると緊張してしまう。マデ君は我々をエスコートしつつも、異邦人の我々の行動がどこまで許容範囲にあるのか常に判断している模様。寺のオダランはあくまでこの寺の氏子のオダランであり、たとえ同じバリ人であっても、氏子でないマデ君は部外者である(らしい)。部外者と異邦人の我々4人は寺の片隅でひっそり見物。

寺の中はあまり緊張感のないガムランの響き。持っているCDに入ってる曲だ。マデ君のお許しも出たのでガムラン楽団を撮影に行く。この楽団では小学3年生くらいの子がレオンというメイン楽器を任せられている。あとの楽器は全員大人で総勢20人程か。子どもの演奏風景をカメラで追っていると、背後のアンチャンにすげえケンマクで怒鳴られてしまう。土門拳ならば、わざと怒らせてから撮影するのだろうが、あいにく俺は渡辺一郎。スゴスゴと退散す。

こういう時こそ、すげえシーンが展開してしまうのが世の常。生贄の牛、豚、亀、鶏などがどんどん運ばれてくるが、気後れしてただただ見物するだけ。シーンのダイナミックさにのまれてしまい、ぜんぜんシャッターが切れない。こんなとき自動でない古物カメラがたまらなくイヤになる、とカメラのせいしてみる。やはりミエははってのライカは意味がない。

一段落してから、みんなで屋台へコーラを飲みに行くと、物乞いの子が2~3人集まってきた。マデ君は無視、兄貴は下を向いている。バリ人が物乞いをしているのを外国人に見られて恥ずかしいのか、それとも物乞いという存在に怒っているのか。俺は物乞いは嫌いだ。何か堂々と自分の芸を売れ。そうすれば君たちは物乞いではない、立派な商取引だ。と、言いつつも、目の前の子どもはプロの物乞いの哀れさで我々を下から見上げ続ける。下からの視線のいやらしさに間の悪



い時間が流れていく。見かねてか、屋台のおばさんが小銭を与えて救ってくれた。テリマカシイ。

寺の中に戻る。マデ君の「カメラとバッグをここにおいていけば、バリ人と同じ。あっちまでいってもいいよ」という言葉に甘えて、片隅での見物から一気に祭壇付近まで躍り出る。お供は兄貴だ。兄貴は有名人らしく、すぐ2〜3人のダチが取り囲む。ヤンキー座りでダベリングだ。彼らが何を話しているのかは全然解らなかったが、兄貴によれば、なんと桂子がカワイイと言っていたぞーだ。アンチャンが寄れば、話題は世界共通、ねえちゃんの事なんだなあ。バリ人にとって、色白で金持ちで宗教的タブーのない日本人女性はカワイイのだからか。それともクタやレギャンで日本人のバカギャルがまきおこす桃色のうわさがそう言わせるのだろうか。

夜6:30、寺の中はズンズン人が増えてくる。祭壇付近は氏子が占めるので、部外者&異邦人の我々はまた寺の隅へ。ズンズンズンズン、正装したバリ人が押し寄せる。ほとんど野茂登番のドジャーズ球場状態。マデ君は女性に(だけ!)優しいのか、桂子相手にいろんな説明をしてくれているようだ。2か所から好き勝手に演奏されるガムランの音階の違いだとか(そんなこと教えてもブダヤんに真珠なのに!)。兄貴は日本語できねえし、俺は英語できねえし、こちらは沈黙の艦隊。

そしたら突然、隣のバリ青年某が、「Where are you come from?」「はい、わたしは日本人です。」おれの英語能力が一切ないのを知るや青年某は日本語に変換モード。「私はクタのホテルで1年ほどボーイをしていました。日本語、少し話せます。」とすげえ流暢な日本語だ。「今では仕事を辞めてブラブラしています。昨日は鳥のギャンブルで10万RP負けました。あなたギャンブルやりますか?」。俺は高校2年の時、パチンコで3千円勝ったのを最後に、21年間やってない。「今日は誰と来ましたか?」この兄貴とだ、と答えると青年はびっくり仰天。「アナタ、彼と知り合いですか?彼はアスティ出身の踊りの先生です」「え!?!」。踊りの師匠とは聞いていたが、まさかアスティ出身だとは知らなんだ。アスティでさ、東京芸術大学みたいなものだ。俺はこの手の権威には滅法弱い。「You graduated ASTI really?」兄貴はこくんと恥ずかしそうにうなづく。こんなえらい人におれは荷物番とか運転手とか着付けとかさせていた現実に慄然とす。兄貴とマデ君がタダモノではないことは、立ち振る舞いの優雅さ、気品ある身のこなし、細やかな心づかいから何となくうかがい知れてはいたのだが。初めのうちは、日本人ギャルがコロッといくというバリ男性の究極の優しさ一般、くらいに思っていたのだが、後の話を総合すると、彼らの家はバリ・カーストの中でも2番目に属していることが判明。前述の優雅さもそこに起因するのだろう。なにしろ寺の中の数千人のバリ男性がほとんどみな同じ衣装を着ているにもかか

わらず、この兄弟はすごく目立つのだ。なにかオーラでも発散している、とでも言おうか。

あ!ご神体の登場だ。小さな御神輿に乗って村のご神体が登場す。その後から黒の腰巻き、白のブラウスでキメた約100名のパーサン軍団。両手を左右に波打たせながらゆっくり進む。その後ろには女性は黄色か赤、男性は白のバリ正装のオバサン、ネエチャン、オッサン、アンチャン等が続く。その数、ざっと500か。ガムラン楽団を従えて、ゆっくりと寺の中を3周する。ゆっくりゆっくり3周する。そうこうしているうちにまた別の村のご神体が登場し、村人軍団が同じようにゆっくりゆっくり3周する。それにしてもなんと厳粛、なんと眠たい光景だろう。これは観光ショーではない。宗教行事なのだ。祈りは見せ物ではない。祈る行為に見せ物を求める事自体が間違いなのだ。次第に眠くなって行くのもしやるないか。9:00だ。そんな我々を察してくれたのか、帰りますか?とマデ君。寺の外はこれも万国共通、出店の灯りの賑やかさ。桂子がバビゲリン(豚の丸焼き)が食いたい、と共食いを欲するもかなわず。さて、ホテルへ。帰りがけ、車を降りる時、「どうせ、また来るのでしょうか?」とマデ君。うん。必ずまた来るからね。それまで再見。

■ 1996年5月3日

今日はネカ美術館へ行くのだ。乗合ベモに乗る。先客は知恵遅れ(らしい)青年とその老母。2人ともキチンと正装している。ネカ美術館着。なんとベモの運転手は入口まで車を着けてくれる。ありがとうね。

桂子はおなかの調子が悪いらしく、ご機嫌斜め。しかし、トイレで全ての矛盾を解決してきたみたいだ。ネカは2回目なので、自分達がどんな絵が好きなのか、どこに行けばそれがあるのか、わかっているもんね。平面的なカマサン・スタイルのコーナーをパスして、バリ人の日常生活を、誕生~生活~死に至るまで1枚のキャンバスに描きたおしたウブド・スタイルがお気に入りに。独りよがりの抽象画もパスね。去年はあまりマジメに見なかった写真のコーナーを今年はキチンと。バリ30年代の貴重な記録である。カメラマンはC.A.KOKE。これらの写真はすべて彼の奥さんの著作、「Our hotel in bali」からのものだという。しかも写真のキャプションには引用ページが記されているではないか!物欲がもりもりと涌き上がる。欲しい。この本が。読めもしねえのに。(一郎)別のスペースではこの本の著者によるイラスト(原画!)も展示されていた。入口でカバンを預けなければならないシステムのため、ペンがなくてメモが取れずに筆者の名前を懸念に覚えてこんでいる渡辺。「さっきの写真のキャプションを撮影しとけば」と提案。もう一度写真展示館に戻って、メモがわりのphoto。

昨年に続いて2度もこのネカ美術館に来たのは訳がある。ホフカーというオランダの絵描きの画集を買うためだ。昨年は日本円で1万円というあまりの値段に涙を飲んだ。しかし1年間、古本屋を捜しても見つからず、今年は絶対買おうと予算を立てて来たのだ。因みにホフカーは日本ではマイナーらしく、美大院生の義弟も、美術書専門の古本屋のおばさんも、その名前すらシラナダ。しかし！\$135もする！そう言えば昨年は空前の超円高の時期。1\$ = 80円だった。135 × 80 = 10,800円でまあ1万円か、と思っていたが、\$135を現在の交換レートに直すと、318,600Rp。日本円に直すと15,930円もする!! 円安と\$ → Rpの換算の悪さも手伝って1.5倍の値段に…。「Discount please!」「Fixd」の一言であえなく×。ええい! 1年間思い続けていた買い物、買ってまえ〜! お釣りの時、100Rp (5円) だけまけてくれた。ま、ありがとね。

帰国してゆっくり画集を見ると、ホフカーという人の生きざまが理解できてすごくいいものだった。印刷もいいし。現地のRpに金銭感覚が慣れてくると318,600Rpはすごい数字だが、日本でいい画集を買ってもそれくらいするもの。自分達が必要な時、必要なものにお金を使うことを決断する度胸は持っていたものだと思う。

画集を買ったところを見計らって、タクシー客引きが寄ってくる。ウブドまで5000Rpと言う。去年と同じパターン。2000Rpを主張するする私たちに3000Rpを譲らない彼。真ん中の2500Rpを提案。不採用。3000Rpで、まあいいか、と乗り込む。交渉していたのはドライバーではなく、交渉屋(ボン引き)だった。ややこしいシステム。そうやって間に人が入るから高くなるんやんかー。

タクシーを降り、横丁に入ったとたんニョマンさんが店から出て来て、手を振って迎えてくれる。そう言えば彼は、初めて私たちがAPA?を訪れた時外に出て出迎えてくれていた。カンがいいというのかな。

ニョマンさんに昨日の正装のレンタル衣装を返却。保証金20,000Rpも返してもらおう。そして昨日のオダランがとても良かったこと、手配してくれたことにお礼を言う。昨日気になっていた、バリの再生紙で作られた封筒(1枚/100Rp = 5円)10枚も買う。

一郎は先客の日本人女性としゃべっている。改装中のモンキーカフェのオーナーらしい。去年訪れてすごく美味しく、雰囲気もとても気に入ったこと、今年は開いてなくて残念だったことを伝える。と、彼女はバリ人の従業員を使うことの難しさをひとしきり。うーんバリはバリで、またそれなりに大変そう。「今度来た時は必ず寄りますから、ぜひ開けてて下さいね」とお願いをして別れる。

今日はバリ最終日で、会社・その他のお土産を買っ

てしまわなければいけないので、APA?からホテルに戻りがてら買い物をするにすることにする。埼玉から来たという、長期滞在の女性がショッピングに同行したいということで、一緒に行く。

一郎はCDとホフカーの画集とで40万Rp以上も使っているの、桂子も何かちょっと思い切ったものを…と思い、アンティーク風のイカットのベッドカバーを捜す。目指す店は閉まっていたが、近くの店で目当てのものと同じようなのがあった。有名なスンバ織りで、値札を見ると140万Rp…。うげげ、ケタが1ケタ違う。けど、化学染料で染めているものが多い中で(去年買ったのはそれで3万Rp) 藍や茜や木の根等の天然染料を使って染めたものは独特の味がある。さらにこのスンバ織りは幾何学的な模様の多いイカットの中で人間や動物をシンボル化した珍しいものでもある。でも、もともとイカットのモチーフは土着信仰と深い関わりがあるというから、ただおもしろいと買い求めてベッドカバーなんかにしたら、それこそ大変な目にあうかもしれない。まあそんな心配をよそに、140万Rp(7万円!)では今後も手が出せないの、キツパリあきらめる決心がついた。

その後、新婚カップルと、友人の合格祝いにちょっとはりこんでウインドチャイムを買う。会社の女性には香油set、中国仲間にはココナツの殻でできたナツツ入れを買う。あと私と一郎にシャツやパンツが欲しかったけど、時間的にも体力的にも無理なのでアキラメル。

ちょっとおなが空いてきたので、節約旅行をしているという埼玉の彼女を考慮し、安そうなレストランに誘う。が、それでも予算オーバーらしい。「予算に合う店に行きます」と言う彼女を見送り、じゃ、私達だけならもうちょっといい店に行こうよとIbu Raiへ。ここはホテルから近く、雰囲気良さそうなので気になっていた所だったのだ。窓際に席を取り、ミックスラッシーとピントランラージを飲みながら、たかだか1800Rp(90円)でこんなに心地よい風と雰囲気が味わえるのに、それをキョヒしてしまう彼女はかわいそうだなあ、という話をする。

しかし料理は30分以上待たされて、ヌードルスープはインスタントだったのにはマイル。うーん。ナシチャンプルーはまあまあだったのだが。急いで帰り、シャワーと荷物の整理。が、4時の迎えのはずの旅行会社の人が3:20に現れる。げげーっつ。あわてふためいてパッキング。こんな状況の中で「時間があるので、マスの村に寄り、木彫りの置物をショッピングしませんか」なんて聞くなよ!

ゆっくりと別れを惜しむはずが、慌てて出発。夕暮れのバリの村々に、車中からお別れをする。でも来年、また来るから。それまで、元気にしていなさいね。

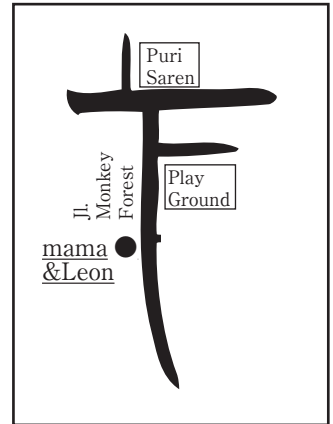
Toko ◇ BEST 店

mama & Leon

昨今なかなか賑やかで華々しいバリの洋服業界ではありますが、世界に向けて輸出されているバリのブランドはまだまだそう多くはありません。その、数少ないバリ発信世界的ブランドの一つが「ママ&レオン」です。現在「ママ&レオン」は、バリに工場を3つ持ちデザイナーを7人抱えるという人気ブランド。ショールームともいえる大きなブティックをサヌールのJ1ダナウ・タンプリングンに持っていますが、とうとうこの度ウブドにも、直営店をオープンしました。

パサールからJ1モンキーフォレストに入り、サッカー場を乗り越してしばらく行った左側。ひとときわハイセンスな店構えは、一瞬ここがどこかわからなくなってしまう程。「ママ&レオン」の製品は主にヨーロッパに向けて輸出されているとの事。店内にはヨーロッパ系モード雑誌がさりげなく置かれたりして、雰囲気もなかなかのもの。広く明るい店内には壁際に洋服がかけられ、ゆったりとした空間の中で落ち着いて心ゆくまで洋服選びができます。白や黒、ワイン、芥子色など押さえ目の色調で、デザインはシンプルですが、最近日本でも人気のスリップドレスや、ブラウス、スカートまたはパンツにタンクトップの3点スーツなど、かわいらしくも上品なデザインが揃っています。ぜひ一度のぞいてみてください。

Jl. Monkey Forest UBUD-BALI Tel:0361-974060

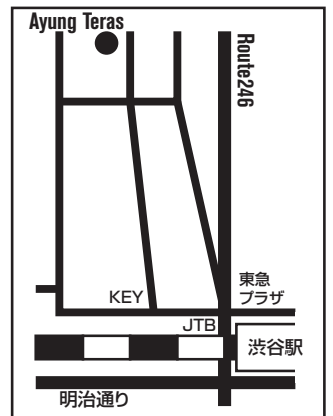


Warung ◇ 味な店

Ayung Teras

ウブドの最新注目スポットをご紹介しますこのページ、今回に限って番外編とさせていただきます。今回ご紹介するのは、東京は渋谷に出来たインドネシア料理のお店“アユンテラス”。このお店のオーナーはつとむさんといって、以前は都内の某有名インドネシア料理のお店で修業をし、それからウブド滞在2年…現地でみっちりスパイスや料理について学び、帰国。まずは新宿に“バンジャールカフェ”というお店をオープンしました。10人も入れればいっぱいになってしまうような小さなお店でしたが、口コミの噂はあっという間に広がり、つとむさんの作る美味しい料理と、妹さんとふたりで切り盛りするアットホームな店の雰囲気に惹かれたファンが急増。このたびついに渋谷に店を移転、規模を大きくして“アユンテラス”をオープンした、という次第。料理はどれも本格的で盛り付けもとってもきれいな。オーナー自らおすすめメニューはルンダン(牛肉のココナッツミルク煮)やグレイ・カンビン(山羊肉のカレー)など。すべてインドネシア直輸入のスパイスのみを使った香り高い逸品ばかり。ここのナシゴレンを食べたらインドネシアでナシゴレンなんか食べられません(本当です)。デザートはケーキはつとむさんのお母さま直伝のレシピ。バナナケーキ、パイナップルココナッツケーキなど、すべていただきたくなくなってしまった美味しさ。店内はテンガナの籠やカットなどが上品に配され、食器はもちろんすべてジェンガラ。東京近辺の、ウブド熱愛症候群患者の皆様、“あ〜バリにいきたいよ〜”という発作が起きた場合のとりあえずの対症療法として、アユンテラスでのお食事、これがよく効くと思われまふ。ぜひお試しください。

東京都渋谷区桜丘町 20-12 ヤシロビル 1F TEL/FAX 03-5458-9099
営業時間 11:30 ~ 14:30/Lunch 17:30 ~ 23:00/Dinner 日曜休業



Tokoz Sayang お店紹介

私の常宿

Pondok Manis

YULIATI HOUSE

小島 基典

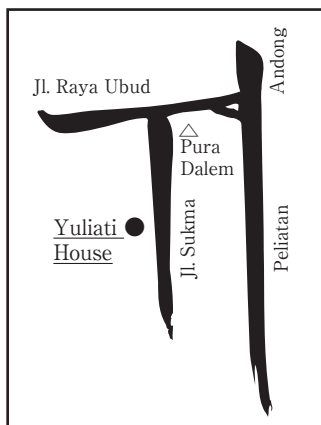
Gunung Sari, Tirta Sari でレゴン (チョンドン) を踊っている Gusti Ayu Sri Yuliati ちゃん。読者の皆さんの中にも彼女のファンは多いと思います。その彼女の家がロスメンを始めました。場所は Tebesaya. Jl.Raya Ubud から Jl.Sukma へ入り、数分ほど行った右手が入口です。明るい色調で清潔な感じのする部屋です。ダブルとツインの2部屋があり、料金は1泊15.000 ~ 30.000Rp。朝食付きで、パンケーキ、オムレツ、ジャッフルなどから選べ、もちろんフルーツサラダ、飲み物 (Teh か Kopi) 付。別途10%税必要。水シャワー付き。

来日したこともある彼女のお父さん (Pak. Alit)、お姉さん (Artatik)、妹さん (Bidani) も Peliatan のグループで踊っています。希望すれば、踊りやガムランを教えてくれるそうです。レゴンダンスを習得したい人にオススメの宿です。



YULIATI HOUSE

Jl.Sukma No.10 Tebesaya Peliatan Ubud, Bali
80571, Indonesia
Tel : (0361)974044



その他のニュース

■ S・T・S・I 卒業制作発表会

2月11日から14日までの4日間、デンパサールのS・T・S・I内の大講堂にて、'98年度卒業制作発表会が行なわれました。今回は極通スタッフの友人達がたくさん出演するというので、はりきって見学に行ってきました。日によって多少のばらつきはあったものの、会場は満席状態。通路にまでも人が溢れています。

学生一人一人、何年間かの勉強の成果と、自分の持つ世界をどんなふうに表示するか、それを形にしたものが卒業制作です。そのために、ガムラン・チームに応援を頼んだり、踊り子を探したり、衣装や舞台装置を考えたり…。労力もさることながら、お金だってかなりかかっていることでしょう。バリでも大学を出るにはお金がかかるものなのだなあと、しみじみ思ったりして。この晴れ舞台のため、みんな努力しているのです。ステージ裏で待機する出演者達は表情も固まり気味で、言葉も控えめ。まさに真剣勝負。その緊張具合がうかがわれます。

さて、内容については、伝統舞踊をアレンジしたものあり、自らの影も使ったワヤン・クリッあり、モダン・バレエあり、民族音楽をストンプ風にアレンジしてみたものあり。中でも今年は、たくさんのクンダンを縦に並べてのリズム・セッションが目につきました。極通スタッフの友人達も目立った失敗もなく、それぞれ個性溢れるステージで楽しませてくれ、ほっと一安心。良いものには惜しげなく拍手と歓声を送る観衆とともに、極通スタッフもすっかり楽しんでしまいました。試験結果は審査の先生方におまかせするとして、一生懸命だった学生達に拍手。そして、ここからの将来の名エンターティナーの誕生を極通スタッフも心から楽しみにしています。

■情報センター「APA ? II」移転のお知らせ！

以前、プンゴセカンにある居酒屋「影武者」の真向いにあった「APA ? II」が、場所を移動しました。新たな場所はJl.Hanomanのかわいいブティック〈PUSPITA〉の隣。以前より、ぐっと利用しやすいロケーションになりました。Jl.Monkey Forestにある「APA ? I」同様、BALIを、そしてUBUDを

より深く楽しみ、より深く知るための各種ツアー（宗教儀礼見学ツアー、JEGOG ツアーなど）や、情報も盛りだくさん用意してお待ちしています。スタッフが日本語を話せるのも、安心です。また、マネーチェンジ、エアチケットの販売、ホテルの予約取り扱い、送迎サービス、レンタカーサービスなども営業していますのでご利用ください。

この移転にさいして、スタッフ一同、気分も新たにリニューアル、やる気充分、というところ。これからも日々勉強し、皆さんに満足していただける様なサービスを提供していきたいと思っておりますので、ご意見、ご感想をどしどしお寄せください。

店主、従業員一同、心よりご利用をお待ちしております。

■ Selamat hari raya Nyepi!!

サコ暦1920年、新年おめでとうございます。…というわけで、今年も3月29日に無事にニュピが終わりました。昨年はニュピ名物のオゴオゴが県の条令で禁止され、なんとなくの足りなかったのですが、今年はオゴオゴ復活で、UBUD周辺もおおいに盛り上がりました。村の青少年達の、オゴオゴづくりにかける情熱はそれはそれは拍手モノです。ニュピが近付くと、それこそ夜を徹してバンジャールの若者達はオゴオゴづくりにいそしみます。そうやって出来上がったオゴオゴはみなケツサクで、夜、通りを歩いていてふいに、うす暗いバレ・バンジャールにひっそりたたずむそれを見つけると、心臓が飛び出るほどびっくりします。そう、オゴオゴは悪霊、怪物を形どったものが多く、最近、デンパサールではハーレーに乗ったランダとかもお目見得したいへんユニークです。さていよいよニュピ前夜。暗くなりかける頃、あちこちで爆竹が鳴り、バレ・ガンジュールの激しい演奏とともにオゴオゴが登場。青年達に神輿のようにつがれて、そのおどろおどろしさを発揮していました。

うぶっなトク その25 ほりり

■工藤賢司氏、パリをモチーフに銀座で個展!!

中国在住10年になる工藤氏は、明朝時代から続く墨絵の画法を得意とする絵描きさんです。そんな彼がUBUDで半年間、創作活動をしました。パリのバナナの幹の繊維からつくった手すきの紙に、工藤氏独特のタッチで



描かれたパリ。きっとあなたのハートにせまる暖かさがあるはず。ぜひ足を運んでください。

●工藤賢司個展—旅の画帖・パリ—

場所：ギャラリー・ポート

東京都中央区銀座1-8-7 新銀座ビル1F

TEL：03-3535-5559

日時：1998年6月8日～13日

●パリ舞踏墨彩画展

場所：銀座煉瓦画廊

東京都中央区銀座7-8-8 銀座倉橋ビル9F

TEL：03-3571-8626

日時：1998年6月8日～20日

■成田発のガルダ便

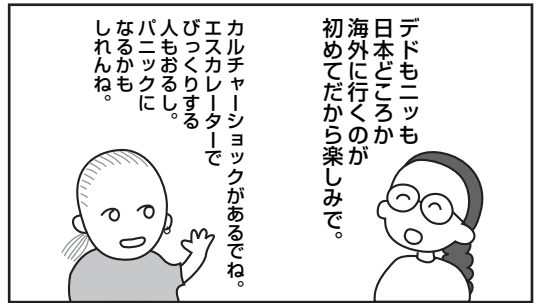
既にもう皆さんご存じかもしれませんが、成田発のガルダ便が、ジャカルタを經由せずにデンパサール直行になりました。嬉しいですね。

●GA881 / 11:00 成田発_17:10 デンパサール着

●GA880 / 24:30 デンパサール発_08:30 成田着

つまり、夕方に着いちゃってクタの夕陽に迎えられ、帰りはその日の定期公演を見逃さずにUbudを発てるわけです。なんだか一日分、お得になった感じがしますね。観たいガムラングループの定期公演の曜日を考慮しつつ、スケジューリングしていたUbud芸能ファンの皆様、(あ、私か…) 今後のスケジューリングには、この時間変更は要チェックです。

でも悲しい事に、機内イミグレはなくなってしまったそうです。噂によると人件費削減の台所事情からとか。まあ、しょうがないから並びますか。／菅原



【年間購読申込み方法】

エメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。お返し申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

●おしらせ●

皆さん！ ご心配なく！ バリは相変わらず平和です！

日本では連日、テレビや新聞で、インドネシア特にジャカルタの暴動の様子が報道されている様で、極通スタッフにも安全確認の電話がひっきりなし。

なんと、インドネシア・バリへの旅行に支障、

規制までしかおこしたということ。

観光の島であるバリの旅行客がほとんどいなくなり、さみしい限りです。

本日21日、インドネシア大統領が、スハルトからハビビへと変わり、今後の軌行から目が離せない、といったところではありませぬが、(詳しくは次号の本編にて報告しますね！) バリは全くもっていつものとおり。

オダランに儀式にと忙しい毎日を送っています。ただ、観光客の減少による、

バリ人達の生活への影響が気になるところ。早く、インドネシア国家が正常な状態に戻ることを、願ってやまない極通スタッフです。



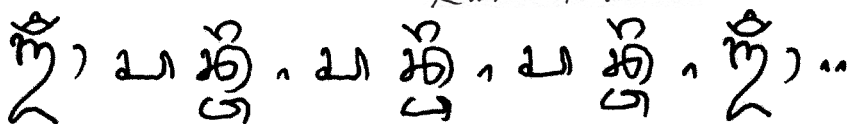
Illust:Fumio

Pengumuman

アムゴンばん

「地球の歩き方」(！?)「みんなの評価も耳にしたりあるけれど、ガイドブックの中で、やはり一番のステイモ！「地球の歩き方」その「地球の歩き方」から新たに「バリ島個人旅行マニュアル」が出版されました。筆者はバリ島を二ヶ月愛する多くの旅行者達。UBUDの長期滞在者として、極通スタッフ達も執筆しています。内容も充実、おもしろいこと間違いなし！是非ご愛読を！！

4月24日、ダイヤモンド・ビッグ社発行
定価 1,540円





Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / 中田 恵

桑野貴子 / 堀祐一 / 菅原恵利子

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：伊藤博史

カバー：工藤賢司

極楽通信「UBUD」Vol. 25

1998年5月20日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1998 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 143 東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302
ポトマック株式会社内, tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101